

小学4年生のこころの発達理解と対応

伊藤 義美

〈キーワード〉

①小学4年生 ②こころの発達 ③発達の個人差 ④親子の関係性 ⑤傾聴

〈講演要旨〉

本講演では、小学4年生の心身の発達理解、発達の個人内差異と個人差、子どもとの日常的な会話・対応、家族の雰囲気・親子関係、子どもの存在をどうとらえるか、対人的関係性とその特質、聴くこととその意義などについて話した。

Understanding and coping with the mental development of elementary school fourth grade students

Yoshimi ITO

〈Key Words〉

① elementary school fourth grade students ② mental development
③ individual differences of development ④ parent-child relationship ⑤ active listening

〈Abstract〉

In this lecture, I talked about the mental and physical development of the fourth grader of the elementary school, individual differences of development, the daily parent-child conversation at home, coping with the child, family atmosphere and parent-child relationship, how to view the existence of the child, qualities of human relationships, and significances of active listening.

小学4年生のこころの発達理解と対応

伊藤 義美

本稿は、2018年2月16日（金）、海津市立高須小学校にて家庭教育学級「お母さんのための『小4こころの発達』対応講座」が開催され、小学校4年生の保護者を対象に行った講演「小学4年生の心の発達理解と対応」をまとめたものである。なお、高須小学校からは、本稿の公表の承諾を得ている。

はじめに

今回は貴重な機会をいただき、ありがとうございます。これからお子さんが前思春期を迎えようとする親御さんは、なにかと心配になるかもしれません。子どもがどうなるか、親としてどうするのがいいのか。かつて前思春期を迎えた自分自身がどうであったか、そのとき自分の親がどうであったか、どう対応してくれたか。私たちはまずは子どもとして、そして次には親の立場から前思春期及び思春期を少なくとも2度体験することになります。

小学4、5年生のこころの発達の理解

子どもが成長・発達するということはそれなりのリスクを伴います。現状にとどまらずに前進することになりますので、成長するための必然的なリスクともいえます。小学4年生、もうすぐ5年生になるお子さんが直面する発達上の課題は、「9歳の壁」とか「10歳の壁」とか言われています。思春期を迎えるための準備の時で、男の子は少年への、女の子は少女への転換の時です。2年後に中1ギャップに直面する前の段階として訪れるこの時期は、こころとからだの発達成長の節目（課題）をやがて迎えることになります。思春期の前門をくぐるといいたいでしょうか。学童期の完成とともに、児童期と別れて思春期の入口に入ることになります。幼虫から蛹への変態（メタモルフォーゼ）によく例えられたりします。誰もが発達上の課題に直面し、その課題をどのように乗り越えるかが問われます。

内面的には自我の形成が進み、親から離れて本格的な自立が始まります。人間関係は親子関係から友人関係へと重心が移動し、親や教師を批判的に見て、親への口答えや反抗が強くなります。自分の世界をもつようになり、他者にはわからない秘密をもつようになります。一人ひとりの個性が出てきます。様々な変化に直面するわけですが、変化のときは危機的になります。しかし危機には危険がありますが、危機をうまく乗り切りことで成長する好機になります。

心と身体、対人関係、学習・運動能力の発達的变化と個人差

発達のスパートがかかり出して、身体面での大きな変化とともに、特に第2次性徴が始まります。身長伸び、体重の増加、体形・体格、容姿・容貌などの身体面で変化があり、変声などが生じ、なかには早いと初潮、精通を体験する子もいます。それらの成熟の前傾化が認められています。初めて経験する急激な身体的諸変化を不安・動揺の中でひとりで受け止めることは、決して容易ではないでしょう。

心理面では、自己中心性を脱して、他者の視点（客観視）をもつようになります。自我の形成に向けてこころの世界（自然観、宇宙観、空想）が広がり、こころの世界を表現できるようになります。自分は何者なのか、社会の中で自分の居場所というべきものが見つけることができるか、自分がこの世界にいたことが適格かどうか、など自らの存在を問うようになります。

感情面では、欲求・衝動や感情の突然の噴出と不安定があらわれます。とまどい、不安、過敏、迷い、動揺、悩み、情緒的不安定（上下に振れ、左右に揺れ、前後に行ったり戻ったり）になる傾向があります。

対人面・社会面では、特定の人物を理想化して憧れを抱くようになります。教師や親の価値基準に合わせることができれば、逆に批判的にみることもできます。大人や社会に反発を感じるようになります。小学校の高学年としての役割をはたすことができるようになります。クラス全体や学校全体を見渡し、リーダーとして下級生を統率したり世話をするようになります。こうした実行力や責任感が発揮されます。友人関係では、同性の遊び友だち・仲間集団（ギャング・エイジ）から、親密な同性の友人関係へ、さらに異性関係へ焦点が移っていきます。男女の性別意識が強くなり、異性に憧れ、異性のまなざしが気になります。大人や友人との対人関係におけるちょっとした行き違いや思い込みによって孤独感や孤立感に陥ることがあります。心理面、感情面及び対人面では、両価的な葛藤状態に陥りやすく、正と負の両極の間を激しく揺れ動くこととなります。

教科学習では、学習が抽象的思考、論理的思考を必要とするようになり、学習でのつまづきが起きて学力差が出てきて、教科の得意・不得意や好き嫌いがはっきりしてきます。または運動面では、運動能力が増進し、子どもに様々な能力差がひろがってきます。

背景にある社会・生活環境の変化

核家族・少子化の家庭が増えてきて、家族内外での会話やかかわりの経験が減少してきていることが指摘されています。そのことが、友人関係やコミュニケーション能力の低下をもたらしています。

幼児期の身体を使った遊びが不足しがちです。身体感覚を十分に使った遊びは、抽象的な思考能力を発達させることとなります。スマホやインターネットが過剰に使用され、なかにはオンラインゲームやSNSへの依存傾向が出てきています。仮想世界と現実世界の境界があいまいで容易に行き来したり、逆に二つの世界が解離して仮想世界に逃避したり、そこから抜け出せなくなります。

日常生活での子どもとの会話・対応

現実世界における日常の家庭生活でみられる家族や親子の会話や対応を考えると、図1のような会話ややりとりがみられるのではないのでしょうか。家庭での、この一週間の親子の会話をふり返してみると、どうでしょうか。親が感情的につい口に出てしまうこともあります。家族や親子の会話では、これらは複合しています。こうした会話や対応の仕方によって、子どもはどのように感じて、何を受け取るのでしょうか。親のいうことを素直にそのまま受け取れるのでしょうか。あるいは逆に額面どおりに真に受けてしまうかもしれません。括弧内は、子どもが感じたり思ったりすることの例を表しています。

本心と表現がうまく一致しないことが少なからずあります。そんなつもりで話したのではないのに、

と誤解されることもあります。「言いたいことを言って、それでおしまい」ではなく、大事などころでは自分が話したことが相手にどのように伝わったのか確かめることが必要になります。たとえ同じことばでも、伝え方やのちに述べる関係性によって伝わる意味は大きく異なります。

・ダメよ、ヘタね、わからないの？ バカじゃないの！ (傷つく、劣等感・無力感を感じる)	否定・非難型
・まずこれして、次にこれして、終わったらこれね！ (自分で考えないで指示を待つようになる)	指示過剰型
・これはよくできたわ、これはまだ不合格ね (親の評価が自分の価値を決めてしまう)	価値評価型
・ガッカリさせないでね、きっとよ、そんなこと許さないわよ！ (不安や恐怖を感じる、窮地に立たされる)	脅し型
・期待してるわ、必ず〇〇してね、お願いよ！ (期待や願いに応えられないとダメな子)	期待過剰・哀願型
・甘えないで！ しっかりして！ 早くして！ (親の意に従順になる)	叱る・注意・命令型
・約束よ！ 誓って！ 約束を破らないでね。 (守らないと罰せられる、罪悪感を感じる)	約束・誓約型
・わかってるって、こういうことでしょ！ (最後まで話せないよ、勝手に決めないでよ)	早とちり・解釈型
・なぜ？ どうなの？ どうしたの？ (話すよう強要され、追いつめられる)	質問攻め・調査型
・あらまあ、大変！ どうしましょ！ (大丈夫かなと不安になる、私が悪いんだ)	あわてる・当惑型
・絶対に〇〇すべきよ。これしかないわ！ (自分では選べない、決めれない、従うしかない)	説得・助言型
・私も昔はそうだった、私の場合は・・・ (人の話しなんか聞きたくない！)	回顧・自己開示型
・かわいそうね、つらいわね、同情するわ (同情してもらっても…、同情なんかいらない！)	同情型
・しっかりね、がんばってね、きつとうまく行くわ (本当にうまくいくかな？ 自信ないよ)	励まし・保証型
・気にしないで、大丈夫よ、皆んなそうなのよ (本当に信じていいの？ 本当にそうなの？)	なくさめ・支持型

図1 日常生活における子どもとの会話の例 (括弧内は、子どもの受け止めの一例)

家族の雰囲気・親子関係

子どもが育つ環境として家族の雰囲気が重要になります。家族にも風景や天気があると仮定して、家

族の雰囲気や風景を風景天気図に描いてみることもできます。家族全体の風景はどんな景色でしょうか。のどかな海辺？とがった岩山？草木もない砂漠？また家族全体の天気模様はどのようなものでしょうか。五月晴れ？薄曇り？雨のち晴れ？土砂降り？暴風の中？天気はどのように移り変わるでしょうか。この先どのような予報ができるでしょうか。時間があれば描いていただいてもいいのですが…。実際に風景天気図に表現してみるといろいろと気づくことがあると思います。

その家族関係の中で働く原理として二つの相対立する原理、つまり母性原理と父性原理があると考えられます。母性原理は「包み込む」という機能を持ち、良きにつけ悪きにつけすべてのものを区別なく包み込んで、すべてのものに絶対的な平等性を保ちます。つまり「わが子はすべて良い子」なのです。逆に父性原理は「切断する」機能を持ち、すべてのものを主体と客体、善と悪、優と劣、上と下などに切断し分類します。子どもを能力や個性によって区別し、例えばわが子であっても「良い子だけがわが子」という規範で子どもを鍛えます。母性原理は子どもを包み込み、育みますが、強すぎると子どもを飲み込み、しがみつき、自立を妨げてしまいます。父性原理が強くなりすぎると、子どもの価値や尊厳を損なってしまい破壊にさえ至ることがあります。家庭においてどちらかの原理に偏るのでなく、両者が適度に融合するとか共存し補い合って全体としてバランスよく作用することが求められます。

また「血は水よりも濃い」というように親子関係は血縁という運命的な血のつながりが特徴（そうでない親子関係もあります）で、これは縦（上下、垂直）の関係です。血縁は親子の縁を法的に切ったとしても生涯ついて回ります。それに対して夫婦関係はもともと赤の他人が主に自由意思を基に同意や誓いや性によってつながりや絆ができたもので、横（水平）の対等な関係といえるかもしれません。したがって別れることも自由意思に基づいてできます。家族関係は、こうした横の関係（自由意思）と縦の関係（運命）が交差してできています。わが国の文化では親子関係でもとくに母子関係（母一息子、母一娘）は、母子間の一体感が強いのが特徴とされています。子どもの自立の問題には母性原理優位の悪い面が関係していることが少なくありません。親自身も自らの内なる親（母親）から自立していることが必要ですが、子どもは母からの分離・独立の課題に直面していきます。親自身には内なる親からの自立と同時に、子どもからの分離・独立が必要になります。このことを明確に認識して、親は親の自己課題に自覚的に取り組むことが求められます。

独自の人間存在としての子ども

では、子どもとの関係で親にはどのような視点や役割が求められるのでしょうか。次のようなことがあげられます。

1. 子どもは、親や家族の所有物ではありません。また親や誰かの分身や代用でもありません。親がはたせなかった願望や家族・家系の期待を代わりに果たしてくれる存在でもありません。一人の人間という価値を尊重することが必要となります。尊重は、利己的な愛情とは異なり所有欲のない愛情といわれることがあります。

2. 子どもの言動の意味や背景を考え、理解して対応することをこころがけましょう。ことばや行動には意図や意味があるものです。本心が、ことばで正確に表現される、また表現できるとはかぎり

ません。ことばにならない思いもあります。感じていることや思っていることは、ことば以上のものです。

3. 子どもとの関係で“ほど良い距離を保つ”ことを考えましょう。しかしまた親子の関係だと、親子だからこそ距離のとり方が難しいことも自覚する必要があります。子どもに安易に近づきすぎたり、離れすぎたり、急変しがちです。

4. 親は子どもに代わることはできません。誰もが1回かぎりの個別の生を生きています。病気や苦しんでいるときは代わってあげたいという気持ちになります。そのような気持ちになることは尊いことです。しかし代わることはできません。ただそばに居て見守り続けること、祈り続けること、寄り添うように同行や伴走することができます。心の中では子どもを決してひとりにしないのです。

5. 親も一人の人間としての在り方が問われます。お母さんの場合は、お父さんの場合はどうだったと聞かれることがあります。親の役割ではなく一人の人間としての生き様を問われ、対話が求められることがあります。

6. 必要ときに子どもの壁になる（対峙する）ことが必要になります。社会の規範を踏み越えそうなときや自他を傷つけるような行動を行いそうなときには、子どもがぶつかることができる、子どもを保護する壁や防波堤となることが求められます。自らの存在をあげて、あるいは存在を賭けて子どもと向かい合う、正面から対峙することになります。

家族関係や親子関係をはじめ対人関係で重要になるのは関係性です。

対人関係における関係性

対人関係の関係性においては、子どもが創造的に豊かに自分らしく個性的に生きる力を引き出すことが重要です。その関係性を促進する特質として、①真実性、②尊重・受容・信頼、③共感的理解があげられます。真実性とは、関係において真実、透明であることです。あるがままで、建前や体面を取り払って純粋にかかわることです。尊重・受容とは、なにであっても相手の感情や意見や人柄を尊重すること、信頼してそのまま受け入れることです。共感を伴う理解とは、外的な言動ではなく相手が内面でどのように感じているか内的世界をそのまま理解することです。これらの促進的特質は別個に存在するのではなく、関係性の中でひとつに統合していることが必要です。

よく聴く（傾聴）ということ

良い関係性は最初からあるのではなく、構築されるものです。関係性の構築では、よく聴くことつまり相手を理解しようと深く耳を傾けること（傾聴）が基本になります。そして受け取った大事なところを丁寧に伝え返すようにします。この伝え返しには少し練習が必要になりますが、それほど難しいことではありません。傾聴には、次のような働きがあります。

1. 混乱や苦しみから徐々に救い出してくれます。
2. 孤立や疎外を解消して、人との共同感覚（つながり）をつくれます。
3. 相手の感情の表出やカタルシス（浄化）を促します。
4. 自己肯定感（自己尊重感）を育みます。

5. 自己探索を促して、自己理解を深めます。
6. 独自の共感的な対人関係をつくります。
7. 孤独から解放し、人生を豊かにしてくれます。

聞くことは日常生活で自然に行われていますが、聴くことは受け身的なものではなく、積極的、能動的な行為になります。深く能動的に相手を聴くことの意義は上記のようにはかりしれないものがあります。人の話を聴けることが、親子だけでなくあらゆる対人関係、対人的コミュニケーションの基本であることがわかると思います。

おわりに

限られた時間で、十分意を尽くせませんでした。子どもは親あつての子どもです。子どもは自ら成長するとともに親によって育まれます。親も子どもあつての親です。親も子どもによって育まれます。親は親になり、子どもを育てることで親として成長していきます。親と子との活きた相互性を介して、ともに成長していくプロセスを生きることになります。親御さんの在り方やお子さんとのかかわり方を考え、理解していただくうえで参考になるものがひとつでもあれば幸いです。

参考文献

- 河合隼雄 1994 『流動する家族関係』（河合隼雄著作集第14巻） 岩波書店
- 河合隼雄 2002 『日本人と日本社会のゆくえ』（河合隼雄著作集第Ⅱ期 第11巻） 岩波書店
- メアーンズ,D.&ソーン,B. 1988/2000 （伊藤義美訳）『パーソンセンタード・カウンセリング』 ナカニシヤ出版

伊藤 義美 人間環境大学人間環境学部・人間環境学研究科教授（臨床心理学）